



参道から山門を望む

絵と文・山本絢子

往時は多くの塔頭たとうをもち、関東の高野山ともいわれた王禅寺。いまでも十二年に一度(子年)のご本尊のご開帳の時は、バスを連ねて関東一円から多くの参拝者がやってくる。

何もないときの王禅寺は、大きな樹木と竹に覆われ、鬱蒼とした静寂の中にある。

人けのない参道は、夏草と落ち葉で、歩くとさくさくと音がして心地よい。

夏の今は、藪茗荷の白い花が山門の金剛力士に清楚な美しさを添えている。

秋には、もみじがひなびた山門に彩りを添え古刹王禅寺が輝きを見せる。

落葉樹が葉を落とした冬のたたずまいも、早春の梅が香の時期もいい。

王禅寺には、四季折々、訪れる者を浄土にいざなってくれる原風景がある。

本堂前の庭には、柿生の地名のおこりとなったといわれる禅寺丸柿の原木(かながわの名木百選)が保存されている。

原木の傍らに白秋の自筆による「柿生」の句碑がある。



43

麻生区
文化協
会報

星宿山王禅寺

麻生区文化協会に期待するもの

麻生市民館 館長 武田 拓明

昨年から麻生市民館に着任以来、京会長をはじめ会員の皆様方には、市民館の社会教育施設としての役割をご理解いただき、また他団体の模範として施設・設備を大事にご利用いただいていることに感謝と敬意を申しあげます。

開館二十二年間、今日までフル稼働し、麻生区民の方々の生涯学習・文化活動の拠点として親しまれてきた文化センターですが、設備老朽化が原因による機器の故障が昨年から集中して発生してしまいました。昨年九月の台風到来時には野外ステージの天井壁の一部



が崩落、十一月には図書館集會室天井からの水漏れ、今年一月には大ホール音響卓が故障し、復旧に苦慮いたしました。が何とか修理・交換を終えてホッとしております。

人間のライフサイクルでいえば、麻生文化センターは既に青年期を過ぎた成人期に入っておりますが、機器の故障もオーバーホールすることでもう一度元気に活動できる時期を迎えていると思います。そして麻生区文化協会を始め、市民館を愛する市民の方々が文化創造をめざして生涯学習、そしてまちづくりの活動に生き生きと活動されている姿を拜見する時、麻生文化センターが区民の方々の生活の中に定着していることに深い感慨を覚えます。

「文化が地域を創る」とは市民館開館時に初代会長藤田親昌先生の言われた言葉ですが、この志は今、文化協会の方々に引き継がれ、会員の方々の地域文化活動への主体的な参加によって芸術・文化のま

ちづくりを推進する力となり、深く根を張り、麻生区に活力と潤いをもたらしております。

ところで生涯学習には知識・技術を充足する過程と学んだ成果を実践する双方方向作用があるといわれますが、この学びの循環・ネットワークを地域社会の中につくるのが学校教育や地域の活性化を図るうえでキーポイントになるのではないかと思います。その意味で文化協会の会員の方々がこれまで蓄積された知識・技術は地域の中でもっと利用される仕組みを考えていく必要があると感じます。

この点夏休み親子教室の意義は大きく、技術・知識を伝えるための出会い・体験の場を介して、子ども達との交流・ふれあいを通じて文化活動が伝承されていることを実感させられます。また古風七草粥を復活させ、正月の区民の出会いの集いとして復活させた動きは、川崎北部に新しい文化の風をもたらしました。文化協会が、さ

らにどんな新しい文化の風を開発し運んでいただけるのか楽しみにしております。

麻生区には、これまで今年で二十一回を迎えた麻生音楽祭等、市民館を拠点として芸術・文化のまちづくりを市民主体で作ってあげてきた歴史があります。麻生をふるさととして生まれ育ったこともまた区全体の祭りが欲しい！から始まった「あさお区民まつり」では、昔この地でおこなわれていたどんと焼きを復活させましたが、これらの活動をベースに、麻生区の芸術・文化活動は、川崎市の文化行政の支援の元で市民・行政協働事業として取り組まれる新しい段階を迎えています。近い将来芸術・文化に関する国際フェスティバルの開催も夢ではなくなることでしょう。

その新しいステージの中で麻生区文化協会がこれまでに蓄積したノウハウを発揮して、事業企画のコーディネートを担うという場面も出てくるのではないかと思います。麻生区民の文化活動の願いを大切に受け継いで、麻生区の地域に文化活動の魂を入れていただく文化協会の役割に期待しております。

カメラと私

千坂 隆男



私が初めてカメラにふれたのは、昭和十三年の正月であった。当時航空兵であった叔父が、満州で買ったというコダックのボックスカメラで家族の官参りの晴れ着姿を写したのである。写真屋でフィルムを抜き現像を頼むと、「隆男ちゃんお年玉だ。使ってね」と私の手にカメラを渡した。小学一年生の私にはうれしさよりも驚きとまどいの方が多かった。

十二枚撮りの桜フィルムが九十銭、現像・焼き付けをすると全部で一円五十銭もかかる。一銭銅貨が使える時代である。

写真は年に一度か二度、特別な

日に家族を撮った。背中に太陽を背負い、「動かないで」といいながらシャッターを切った。今に残る母親の写真はいかにもまぶしそうである。

昭和十六年、戦争が始まるとフィルムはなくなるし、胸にカメラをブラ下げて歩くのも憚られ、カメラはタンスの奥にしまわれた。私は昆虫採集に熱中する。

昭和二十年、神戸で大空襲に遭い父親の故郷愛媛県に避難した。当時中学二年生になっていた私も工場に動員された。八月十五日の玉音放送は、もう死ななくてもいいのかと他人事のように聞いた。

昭和二十二年の夏になると世の中も落ち着き、海水浴場に人が詰めかけるようになった。友人の〇は進学費用を稼ぐのだとセミパールで街頭写真屋をやった。私の忘れていたカメラへの思いがよみがえった。従兄弟や友人にカメラを借り、学校の山岳部に同行し写すようになった。学校の暗室を使っ

て、現像や焼き付け引き伸ばしなど作業も覚えた。将来は化学の分野へ進学したいと思っていた。

新制大学の誕生など大変動の中で家の資力を考え、授業料免除・奨学金交付の教育学部へ進学した。昭和二十六年四月十五日初めて五千五百円の給料を手にした。

その頃、学校は毎年校長先生を真ん中にクラスごとに写真を撮ることが例となっていた。学校行事の記録は文書だけであった。私はまず運動会の写真を一本撮った。プログラムに番号を入れ無駄なく偏りなく撮影した。校長先生は大満足で費用は学校で持つといい、教頭先生はアルバムを買ってきて貼り付け永年保存だと喜んだ。これから大きな学校の行事には必ず記録係として分担した。昭和二十八年秋結婚することにした。この頃出始めたカラーフィルムで撮ろうと考えたが一本九百円だ。決められた封筒に入れ東京の会社に出す、スライドになって帰ってきた。学校の幻灯機で見ると、まさに映画の世界だ。

昭和二十九年、自分のカメラを手に入れた。アサヒフレックス。国産35ミリ一眼レフ、月給三月分



長谷寺のボタン (19・4・28撮影)

であった。学校行事の撮り方、モニタージュの方法について講習をして若い教師に引き継いでも自分のカメラは持参した。

四十一年間の教員生活が終わり、年金生活に入った。写真の勉強がしたくて週一回青山に通い、風景写真を選んだ。人の行けない所へ、人の行かない時刻に、重い機材を担ぎ込まねば人を驚かす作品は生まれぬ。まず体力気力がなくなった。六十九歳で山はやめた。七十五歳で大病にかかった。

これからは自分が楽しむために写真を撮ろうと思う。「カシヤ」とシャッターを切ったときの快感は、ほかでは味わえないものである。

子どもと本を こよなく愛した 渋谷益左右さん

児童文学研究者 伊藤 始

はじめに

渋谷益左右さんに初めてお会いしたのは、「私設 ゆりがおか児童図書館」の会議室だった。昭和五十七年の夏のことである。温和でもの静かな方だが、お話には熱意と説得力があり、若者のような情

熱に圧倒された、これが最初の印象である。

図書館は、東百合丘の住宅街のなかにあつて、三角屋根の建物である。庭には三本のシイの木があり、樹上では子どもが数名歓声をあげていた。

ここが、渋谷さんが私費を投じて建設した児童図書館である。敷地は、娘さんのために買っておい



ゆりがおか児童図書館内の渋谷さん

もののだという。金、モノを求めて狂乱している時代に、こんな人がいたのだ。私は頭を強打されたようなショックと感動に、心がうち震えた。わが家から徒歩で二十分ほどの所にあるにもかかわらず、六年間も知らずにいた自分を恥じた。

以下に、私の知る範囲での渋谷さんについて述べたい。

本に魅せられて

渋谷さんの本との出会いは、少年時代にさかのぼる。旧制の昭和第一商業学校一年生のとき、担任の先生が昼休みに読んでくれた、志賀直哉の『小僧の神様』がきっかけだった。

渋谷少年は、小僧の社会的地位の劣悪さからくるはじめさにショックを受ける。自分の家も染物屋で、家業を継ぐためには、他の商家の小僧として修行する習わしがあった。進学しなければ小僧に出される運命にあつたのである。

そうした自分の人生と重ね合わせて、人ごとではないという思いにかられたのだった。

文学作品には、人の生き方が描かれていて、初めて知り、心からの感動を覚える。本のすばらしさ、おもしろさを知った渋谷少年は、以来読書のとりこになり、

文学書に熱中する。社会人になってからは、「多磨短歌会」で北原白秋の指導を受ける。白秋亡き後は、佐藤佐太郎の「歩道短歌会」の同人として活躍する。歌号は、渋谷春秋。

最近の二首を紹介しよう。

●利に走ることのみせず頑なに

●愚かに生きて傘寿を越えぬ

●わが常に座りてものを思う場所

さらに晩年、若いころから続けてきた文学研究の成果を、『鑑賞「麻生区と万葉集」』、『麻生区の文学鑑賞』として上梓する。

渋谷さんは、三井生命保険株式会社で長年勤務し、京都支店長を最後に定年退職した。そして第二の人生のことを考えはじめたとき、脳裏に浮かんだのが、「好きな本と、子どもたちに囲まれて余生をすごしたい」だった。

夢実現へのヒントになったのは石井桃子著『子どもの図書館』である。石井さんが自宅に開設した「かつら文庫」には、子どもたちが自由に入りにして本を楽しんでいる。

もう一つは、日野市の「多磨児童図書館」の見学だった。小規模で、職員は二名しかいなかった

が活気があった。図書館は規模より人だ、運営だと思う。

開館への自信を深めた渋谷さんは、奥さんと娘さんの協力を得て昭和五十一年八月二日、「私設 ゆりがおか児童図書館」として待望の船出をした。麻生区に公共図書館や、子どものための文化施設がなかった時代である。

人々に囲まれて

開館当初、多忙を見かねて手伝いに来ていた近隣の母親たちが、その年の秋ごろ、「ゆりの子会」という図書館友の会を結成した。そして図書整理、貸出し、「ゆりの子だより」の発行などの仕事を分担した。

また、渋谷館長の助言と協力のもとに、おはなし会、わらべうたの会、人形劇・ゆりの子座、親子読書会など、子どもを対象にした活動が生まれた。さらに、絵本の勉強会、子どもと本の講座など、会員の学習会へ発展していった。

諸活動のなかで、唯一子どもが主人公になるのが「一日子ども図書館」である。これも渋谷館長の発案によるものだ。開館の翌年から、子どもの日にちなんで毎年五

月に実施されている。

簡単に説明すると、子どもたちの活動は、読みかせ、パネルシアター、ストーリーテリングなどの出し物と、本の貸出し、カード整理などの事務になる。

リーダーの母親の話によると、出し物はそれを作っていく過程がすばらしいという。子どもが自由に意見を出し合い、討議し、協同して制作していく。楽しそうに生きいきと、夢中になって活動する子どもたちの世界が展開される。そして、本番での緊張した演技も貴重な体験になるだろう。

渋谷館長は読書以外にも、こうした経験や人との交流が、子どもたちの心を豊かにし、自信を持たせると考えていた。だから子ども中心の活動を推奨したのである。

渋谷さんの、子どもに対する深い愛情と信頼を象徴するようなイベントである。

ゆりの子会の活動は、三十一年目に入った今日まで連続と続いている。それは、渋谷館長の人柄と見識のたまものである。

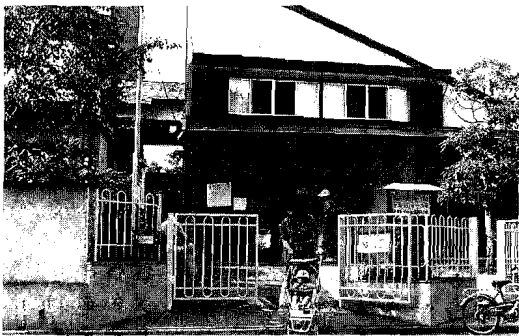
図書館は、一階に書棚と閲覧机があり、二階が畳二間の集会所になっている。この部屋がグループ

活動の拠点である。よくぞこういうスペースを用意してくれたと、その先見の明に頭が下がる。

わが子が巣立っていつても、ゆりの子会の一員であることに誇りと喜びをもち、活動している大人がたくさんいる。つまり、この児童図書館は、コミュニティセンターとして機能しつづけているのである。

おわりに

渋谷さんはその功績を称えられて、「伊藤忠記念財団子ども文庫功労賞」、「文部科学大臣賞」、「久留島武彦文化賞」など数々の賞に輝



私設ゆりがおか児童図書館外観

いている。地域文化の発展に貢献した、その大きさを思えば当然のことである。

私の担当する親子読書会には、ご夫婦で毎回参加され、本の感想、戦争と人々の生活、地域社会の移り変わりなどをわかりやすく話してくれた。子どもも大人も、いつも楽しみにしていた。

「本は不思議なもの、私の一生を楽しくし、時には私を励まし、処世にも役立った。そして私を常に夢中にさせた。本とは不思議なもの」と、十五周年記念誌「みんなのとしよかん」に記されている。

子どもと本を、こよなく愛した渋谷益左右さんは、平成十八年九月二十六日、病のため八十八歳の生涯を閉じられた。

天国で、子どもたちと本に囲まれていた渋谷さんの温顔が浮かんでくるようだ。

最後に、渋谷さんの短歌を二首紹介して筆をおく。

- 図書館へ一輪車にて来し少女
本を小脇に漕ぎつつ帰る
- 図書館に来る幼子が赤まんまと
嫁菜の花東吾に差し出す

(日本子どもの本研究会会員・金の星社版「ぼくらの館長さん」著者)

平成十九年度 夏休み親子教室

菅野 明

今年度は十四教室と特別講座として科学教室を開講しました。

総数八四二名の受講希望がありました。各教室には会場の広さや内容から人数に制限がありますので、全体で三六一名に参加できる案内となりました。実際にこの夏、「親子教室」に参加した子どもは三二一名です。保護者等の参加は一五〇余名ありました。

どの教室でも子どもたちの目が輝いていました。一生懸命な姿がありました。講師の先生も時間を忘れるほど、新鮮な体験の場がたっぷり出されていました。

今日、子どもたちを見守り育てていくということの中で「地域の教育力」が問われています。麻生区文化協会は以前より、未来の文化の担い手である子どもたちとその親たちに日本の伝統文化にふれる機会をさまざまな形でつくってきました。そして、平成十五年度から「夏休み親子教室」という名

称で、小中学生を対象にした講座を開くことになり、今年で五年目です。

夏休み親子教室は「余暇の活用」「伝統文化を理解し親しむ」「国際社会に活躍できる日本人の育成」をめざしています。学校は昨年度より二学期制になったこともあって、各学校による夏休みの行事が組まれてきており、そうした行事と重なるということもありますが昨年度来の様子から、文化協会の教室もなお望まれていると考えています。

今年度もゆかたを着て踊る、お茶の作法、お花を飾る、墨筆で楽しむ、和紙を染める、お手玉を作ったり遊ぶなど日本の伝統文化に由来するものを中心に企画、講師の先生方にも応援いただきました。新たにクラシックバレエと粘土でつくる（やきもの）を開設しましたが、応募数がたいへん多くまた、受講する真剣な姿から子どもたち

の興味関心の深さを知りました。郷土を知る・調べるの教室は高学年生の募集のため応募数は多くありませんでしたが、協会として継続の方向を考えていきます。

特別講座の「科学教室」は神奈川県科学技術アカデミーの先生方による光触媒の不思議、「汚れないガラス、曇らないガラス」と題して、実験と講話をいただきました。低学年生の受講が多かったのですが親と子がやがて科学へのおもいを膨らませますよい機会になったと考えます。今後も夏休み親子教

室の中で計画していつてはどうかと考えています。

伝統文化について予習してきたという子どもや応募はがきに期待の一筆を記してきた保護者のかたも多くおられ、心強く感じているところですが、半数以上もせつかくの応募をお断りしなければならなかったということがあります。教室数を増やしてきたという経緯はありますが、どう応えていくかという課題があります。

親子教室の“親”にはどのような参加の仕方が望ましいか、子どもが見守りや介添えだけでなく、保護者のかたも受講者として申し込む、そうした募集のあり方（今年度は一部実施した）も検討したいことです。

この事業は、講座の責任者の方はもとより、協力者、サポーターとして裏で支えてくださる方々の力とボランティアとしての自覚があつてこそ推進して行くことができます。会員の皆さんの総意を集めてよりよく発展していくことを願っています。



クラシックバレエ教室風景

舞台衣装をつけた

「民藝」の女優さんを描くデッサン会

阿部 芳子

今年二十三回目を迎えるデッサン会が、六月三日(日)麻生市市民館大会議室で開かれました。五十名といつても多数の方が大会議室に集まりました。毎年楽しみにしている方も多く決まった場所にイーゼルを置く人も見受けられました。

モデルは劇団「民藝」の若杉民さんと青木道子さん。若杉さんは落ちついたライトグレーの着物姿で清楚なイメージ。青木さんはオーストラリアで買ってこられたという洋服姿で、つば広の帽子を取り合わせ活動的な雰囲気なモデルが所定の場所に座り、いよいよデッ



デッサン会風景 (モデルは若杉民さん)

サンが始まりました。写真のシャッターの音をさせるのも憚られるような緊張した中で時が瞬く間に過ぎていきました。

途中モデルが場所を移動する二十分休憩の時、明るいオレンジのシャツを着こなし、十才以上若く見える最高齢の方(九十代)にお話を伺うことが出来ました。お家では奥様を介護されており、時間をやりくりして、デッサン会にいらしてるとの事でした。好きな事に夢中になることが有るのはとても大切なことかと感じられたひとときでした。

又ある女性は、モデルが女優さんだと絵を描かされているように筆が動きまわると言っていたのが印象的でした。
麻生区美術家協会の指導の先生方にも、参加者の絵にアドバイスし、その言葉かけで筆が進む様子を見て、さすがだなと感心してしまいました。身も心もリフレッシュされた一日でした。

会員の活躍

笠原秋水古希記念展

平成十九年五月一日から六日まで、笠原秋水古希記念展がアートガーデンかわさきを会場に開催された。

小学校の教育実践と書作活動の両輪を回しながら退職されて十年、共に今だ現役で活躍されている笠原氏の古希を記念した回顧展である。

横浜国大で教師を目指した笠原氏はそこで恩師である中山鶴雲先生に出会い、以来学生時代から日々書技を磨いた。卒業後も小学校教師を貫き、ことばと書写教育に専念された。

本展は、笠原氏が邁進してきた芸術と教育の起点から現在までの軌跡を、余すところなく紹介している。当文化協会創立二十周年記念誌の表紙を飾った氏の作(第三十回記念凌雲選抜書展出品)である「迪」を連想させる。

笠原氏は学生時代より、多芸・多趣味であり、その記録を見ると、どこにそのような余力があったのかと驚かされる。
野球、陸上競技、セイノカミ、



1,000人目の入場者に花束を(右が笠原氏)

映画、落語、庭仕事、野草料理、三行コント、川柳……。

知る人ぞ知る氏の世界をかいま見ることでもでき、微笑ましい。

来場者はだれもが、氏のもつ芸術と教育と遊び(ごころ)の三拍子を、今日の不安な教育事情に重ね合わせたことであろう。

平成九年の読売・日本テレビ文化センター川柳講座でトップ賞になった特選句を紹介する。

●教育の虚像を猫がなめにくる

笠原 草枕

(松田洋子)

会員の活躍

※佐藤英行 ドロイニング展

平成十九年五月十日から二十九日まで、ギャラリー華沙里において開催された画廊企画「佐藤英行ドロイニング展」。

現代美術作家として精力的に油絵の新作を発表されている佐藤氏だが、ドロイニングの個展は珍しい。画家にとつてドロイニングは、絵画制作の基本であり、作家自身のもつイメージの整理にも必要な作業である。

来場者の中には、作家の発想の原点をのぞき見たようなトクをした気分になった方もあったのでは。「飾る絵」としても、気軽にホンモノを味わえる作品群であった。

(松田洋子)



個展風景

※ハンガリー・スロバキア、国境を越えて集い、踊って！歌って！

藤間勲七孝

きれいな刺繍の白いブラウスにスカート、黒のブーツの民族衣装で若い男女が激しくハンガリーダンスを踊る。六カ国参加のダンスの中に加わり、日本舞踊と童謡が絶賛を浴びた。

世界ユネスコ協会主催「ハンガリー・スロバキア国際舞踊祭」に招かれ、日本から『ふじ舞踊団』『麻生童謡を歌う会』が参加。日本の伝統舞踊と童謡を五日間に六回の公演を行った。

丘にそびえる十四世紀の城の前がオープンニング式典会場。六カ国の代表が民族衣装をまとい、日本の少女たちが振袖姿で国旗を持って入場。みんなでフォークダンスを踊るころは夜空に満月がくつきりと輝いていた。

ハンガリーとスロバキアの国境を出たり入ったり。舞台は全部野外で、湖上に張り出した水上大ステージもあり、超満員。

パレードで「あさお祭り唄」を振袖姿が踊り歩けばどこでもカメラの嵐！日本の民族衣装・伝統文化の素晴らしさを日本の若人た

ちは誇りにして欲しい。

(ふじ舞踊団団長)

※『昭和家族和音』(麻生洋乃著)を

読んで

塩川 孝

この話は、私が高校二年生の時から始まっています。当時の私は程遠い話題です。昭和三十八年当時、全雇用労働者に占める女子の割合が三十一・五パーセントと驚く数字です。

この時代は多くの家庭が経済的な必要性から就業せざるを得ない状況だったのでないでしょうか。親は子の行く末を心配しながら、家庭内の絆をしっかりと守り続けてきた……そんな様子がひしひしと感じられます。

昨今、ますます女性の社会進出が進む中、保育所等の環境整備、企業の雇用制度改正が行われていますが、乳幼児と親のかかわりが希薄になることが心配です。

保育所は、子どもを日中預かり、親をサポートし、命を育み教育する役割を担っています。しかし、子育ての原点は家庭であり、親の愛情が子を育てていくのでは？と読み終えて感じます。

「子どもは、人間として未完成だが、人としての価値は全くおとなと同じ」この言葉がいちばん印象に残りました。

(麻生区地域教育会議事務局長)

編集後記

▼『昭和家族和音』は、当会会員の松田洋子氏が筆名を麻生洋乃として、日本文学館から今年七月に出版された小説です。表紙カバー絵も画家である氏の「全国絵画公募展IZUBI」での入賞作です。今の時代だからこそ、ご一読を勧めたい。

※川崎市立図書館に所蔵されています。(橋本記)

松田洋子・関森田鶴子・山田美美子
田口正太郎・千坂隆男・橋本周
佐藤勝昭

麻生区文化協会会報
からむし 第四十三号
平成十九年九月三十日発行
発行人 麻生区文化協会
会長 京 利幸
編集 麻生区文化協会
広報部
川崎市麻生区万福寺一五二二
麻生文化センター内
〇四四一九五二一一三〇〇